

# 親の「生きる力」と子どもの頃の体験

## Effects of experiences in childhood on Living skills

安藤 玲子<sup>1)</sup> 池田 まさみ<sup>2)</sup> 宮本 康司<sup>3)</sup>

Reiko ANDO

Masami IKEDA

Koji MIYAMOTO

### 【問題の背景】

#### 1. 親の「生きる力」とは

今日、子どもの教育において、積極的かつ主体的に生き抜くための「生きる力」の修得が重要な到達目標とされている。子どもにおける「生きる力」は、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」と定義される（文部省、1996）。これは、成人してからの学士力（文部科学省、2000）や、社会人基礎力（経済産業省、2006）に通じる能力であり、教育者や保育者に必要とされる創造的に問題解決をする能力（藤木、2009）の基礎といえるものである。

子どもにとって主たる保育者である親の「生きる力」は、近年、早期教育の必要性が指摘されている「批判的思考力、（Ennis, 1987, 1991）」に加え、子育てに関わる人間関係や、子どもの危機管理やしつけ、子どもの教育に

関わる情報収集などの親特有の要素を想定して考える必要がある。例えば、親特有の「生きる力」の要素として、楠見・平山（2009）が扱った食品に関してのリスク認知などがある。彼らは、20～60歳代の成人男女1,500名を対象としたインターネット調査で、女性であることと子どもがいることが食品リスクリテラシー全般に正の影響力を持ち、また情報収集と食品リスク感性が高いほど輸入品を回避することを示している。安藤・池田・宮本（2012）は、このような特有の要素を持つ「親の生きる力」を達成スキルと対人スキルに分け、特に対人スキルに関して、子育てに関わる情報収集、自分や他の子どもの世話といった親特有の要素をいくつか組み入れた測定尺度を作成した。

ところで、このような親の生きる力には、学歴が関連するという議論がある。先に挙げた楠見・平山（2009）は、批判的思考態度、科学リテラシー、食品リスク知識には、学歴が関連し、教育歴が長いほどこれらの能力が高く、知識が豊富であることを示している。同様に安藤ら（2012）も、教育歴が長いほど「親の生きる力」が全体的に高く、特に「論理性」や「探究心」などを含む達成スキルが

1) 金城学院大学人間科学部

2) 十文字学園女子大学

3) 東京家政大学

高いことを示している。さらに、保護者の教育歴が長いほど「子どもの生きる力」の「公共意識」と「創造性・探究心」が高いことから、親が受けてきた教育が子どもの生きる力に影響する可能性を指摘している。

では、生きる力はどのように育成すればよいのだろうか。文部科学省(2010)は、子どもの生きる力の育成に、自然や社会の現実に触れ、身体全体で対象に働きかけ関わっていく体験活動を推奨しており、様々な実践的な活動事例を紹介している。また、米澤・米澤(2003)は、教育環境における「学習の場」理論を提唱し、現実の生活場面から推測できる現実味と、自主的に活動するための学習課題の意識化、個と集団のかかわり、知識の再構成を行う場としての授業案を提示している。

## 2 子どもの頃の体験と子どもおよび成人後の「生きる力」

自然体験が子どもの生きる力のどのような側面に関係するのかについては、いくつもの実践研究(蓬田・飯田・井村・関・岡村, 2003; 宮本・池田・安藤, 2012)がなされている。例えば、児童対象に行った2週間程度の2つの長期自然体験を比較した蓬田ら(2003)は、長期自然体験に参加した児童は、参加していない児童と比較して、体験期間中に、有能感及び他者受容感が向上したこと、更に、体験期間中に自主性・自立性の育成を目標とした指導を行った場合、児童の自己決定感が向上したことを示している。また、自然体験の世代を超えた影響として、宮本ら(2012)は、保護者の幼少期の自然体験が、その子どもの生きる力全般、なかでも「対人効力」や「感受性」に影響することを指摘している。

過去の体験とその後の生きる力に関わる能力との関係については、子どもの頃の遊びと

現在の習慣や資質との関係を調べた研究によると、幼少期の豊富な遊び経験が10歳代から30歳代の学生(通信制)の現在の生活習慣にポジティブに影響すること(島根・加藤・茗井, 2001)、子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、読む本の冊数が多く、学歴が高く、収入が多く、さらに、結婚率や子どもの数が多いこと(岩崎, 2010)、様々な体験を行った青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身につけており、自己肯定感も高い傾向にあること(白木・土屋・中村, 2011)などが示されている。

また、子どもの頃の地域体験と成人後の資質に関しては、地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法・教養等の資質・能力が高いという報告がある(白木ら, 2011)。

子どもの頃の家族関係と成人後の資質に関しては、幼少期から学童中期までの家庭生活で、規則遵守や習慣形成などが厳しく、しっかりしていた場合、成人になってからの忍耐力や知的抑制、自己抑制への関心が高く、希望と上昇志向も高いという研究(伊藤, 2005)がある。

また、教育的視点に立ってみると、自尊感情や人間関係能力といった保護者の資質が高いほど、親子関係が良好で、その子どもは「困ったときでも前向きに取り組む」等の自立的行動習慣が身につけているという(白木ら, 2011)。また、子どもの生きる力には、保護者の「論理性」や「探究心」などの批判的思考態度が関与すること(安藤ら, 2012)、母親がストレスをうまく制御できる場合、新奇刺激がある環境におかれた子どもの空間記憶が増すこと(Tang, Reeb-Sutherland, Yang, Romeo, and McEwen, 2011)など、親の資質から子どもの資質への影響も指摘されている。

習い事体験とその後の資質に関しては、早

期教育の経験が小学生の学校成績や認知能力だけでなく、社会的スキルや運動能力にもポジティブな影響を与え（Osakwe, 2009）、特に男子学生の場合、小学校時のスポーツクラブ所属経験が忍耐力、積極性、自己実現意欲、競争意欲、協調性に影響し、小さな頃からスポーツクラブで継続的に運動してきた人は協調性を除いた上記の特性に加え、判断力も優れているという（徳永・橋本・高柳, 1995）。また、幼い頃から音楽を聴いている子どもほど、言語的・非言語的スキルが高く（Galliford, 2003）、幼い頃から音楽を学んでいる音楽家は、その他の集団（運動選手、心理学の学生、ゲームプレイヤー）よりも、聴覚シーケンス記憶の範囲が有意に高かったという（Tierney, Bergeson, & Pisoni, 2008）。さらに、英語の早期学習者は、中学、高校、大学と年数を経るに従い、英語学習への興味を失うが、TOEICのスコアは高い（池中, 2008）という報告もなされており、早期教育の効果についての知見が蓄積されている。

この他には、過去のポジティブな体験が成人後の健康に与える影響（Skodol, Bender, Pagan, Shea, Yen, Sanislow, Grilo, Daversa, Stout, Zanarini, McGlashan, and Gunderson, 2007）や、幼少期の虐待や逆境が脳にダメージを与え、言語、認知、社会的スキルなどの学習面や、将来の逆境への適応的態度などを変化させる（Sullivan, & Lasley, 2010; Shonkoff, & Garner, 2012）という指摘がある。

このように、子どもの頃の体験は、成長してからの達成スキルや対人スキルに何らかの影響を与えることが予測できるが、従来の研究で検討されている体験や成人の生きる力に関わる変数は、包括的であるとは言えない。そこで、本研究では、具体的に、子どもの頃のどのような体験が、成人して親になったときの生きる力（達成スキル・対人スキル）に

関わるのかについて検討を行う。

また、本研究では、親の達成スキルと対人スキルに関わる子どもの頃の体験の分析において、学歴別の分析も行う。理由としては、子どもの頃の学力には、親の教育歴の長さや家計収入の高さ、家庭の文化的環境が関与すること（赤林・中村・直井・敷島・山下, 2010）、また、親の学歴や家計収入は、家庭内の文化的環境の整備や、課外活動への投資、子どもの学習時間に影響すること（篠ヶ谷・赤林, 2012）、世帯年収は、子どもの自尊心や友だちへの適応感、学校への適応感と正の相関関係にあること（敷島・山下・赤林, 2012）などが示されていることから、学歴に関わらず、親の「生きる力」に関連する子どもの頃の体験に、どのようなものがあるのかについて確認する必要があると考えたからである。

そこで、本研究では、第一の目的として、親の「生きる力」である達成スキルと対人スキルに対して、子どもの頃のどの体験が影響を与えるのかについて検討する。そして、第二の目的として、このような影響関係が親の最終学歴によって異なるのかについても確認を行う。

## 【方法】

**調査対象と調査方法** 首都圏某区の公立および私立幼稚園（全14園）の園児の保護者822名（女性：799名，男性：23名）を対象とした。調査は幼稚園を通じて全1,144世帯に調査紙を配布し、留置法により後日回収した。回収率は72%であった。

**調査時期** 調査は、2010年12月3日～2010年12月20日に実施された。

### 調査内容

**親の「子どもの頃の体験」** 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書（国立青

少年教育振興機構, 2001)」を参考に, 文化体験, 家族体験, 自然体験, 地域社会体験の4要素について27項目を作成し, 回顧法により, 子どもの頃にどの程度体験をしたかについて, 「何度もあった(=4)」から「ほとんどなかった(=1)」までの4件法で回答を求めた。分析に際しては, まず, 各項目に関して全体と学歴別の両方において天井効果と床効果が確認された8項目を削除し, それぞれの要素に対応した項目の平均値を算出し, カテゴリ得点とした。なお得点化の際, 文化, 家族の両体験に関しては複合的な要素を含むため, 内容的に類似した体験項目をまとめ, 文化体験は3カテゴリ, 家族体験は2カテゴリに更に細分化した。分析に使用した4要素7カテゴリは次のとおりである。

**文化体験**: ①文化・芸術体験(「美術館や音楽会に行ったこと」など)2項目, ②自学習体験(「望遠鏡や虫眼鏡などで, 天体や生き物を観察したこと」など)3項目, ③習いごと体験(学校外学習(塾, 通信教育, 家庭教師など)を行ったこと)など)2項目。

**家族体験**: ①家族との共同作業体験(「日曜大工など, 家の人と一緒にものづくりをしたこと」など)3項目, ②親との対話体験(「自分の将来や進路について親と話したこと」など)3項目。

**自然体験**(「海や川で貝を採ったり, 魚を釣ったりしたこと」など)3項目。

**地域社会体験**(「先生や近所の人にほめられたこと」など)3項目。

**親の「生きる力」「社会人基礎力」**(経済産業省, 2006)および廣岡ら(2000, 2001)の大学生対象のクリティカルシンキング尺度を参考に, 未就学児の保護者を想定した「親の生きる力」の達成スキルと対人スキルの項目を作成し, 「まったく当てはまらない(=1)」から「よくあてはまる(=4)」までの

4件法で尋ねた。最尤法, プロマックス回転による探索的因子分析を行い, 因子負荷量が.3に満たない項目や複数の因子から因子負荷が示され弁別性がないと判断された項目等を削除した結果, 達成・対人スキルそれぞれに4因子が抽出され, 以下のように命名した。

達成スキルは, 「論理性(5項目,  $\alpha = .733$ )」(例「やることの段取りを考えている」), 「探究心(3項目,  $\alpha = .652$ )」(例「経験したことのないことにもチャレンジしてみたい」), 「情報収集・整理(3項目,  $\alpha = .666$ )」(例「自分の調べたことが正しいかどうか, 他の資料などで確認している」), 「対処能力(3項目,  $\alpha = .633$ )」(例「面白いことや楽しいことを自ら見つけている」)の4因子で, 全14項目での $\alpha$ 値は.827であった。本研究の分析では, 全14項目の平均値を達成スキルの尺度得点として用いた。

対人スキルは, 「子育て関連の情報交流(5項目,  $\alpha = .703$ )」(例「園の他の保護者と, 園の方針や先生について, 話すことがある」), 「対人効力(3項目,  $\alpha = .705$ )」(例「人前でも緊張せずに自己紹介している」), 「自他の子の世話(3項目,  $\alpha = .576$ )」(例「自分の子ではなくても叱るべきときはきちんと叱っている」), 「他者への礼儀(3項目,  $\alpha = .586$ )」(例「使うべきときに, きちんとした敬語を使っている」)の4因子で, 全14項目での $\alpha$ 値は.808であった。本研究の分析では, 全14項目の平均値を対人スキルの尺度得点として用いた。

**デモグラフィック要因** ①園児の年齢と性別, ②園児との続柄, ③回答者の年齢層, ④回答者の最終学歴を尋ねた。

## 【結果】

### 回答者の属性

回答者は, 30歳代が全体の66.6%を占め

ていた。回答者と園児との続柄は，全体の96.8% (796名) が母親であった。最終学歴は，高校 (20.7%)，短大 (44.5%)，大学 (23.0%) の卒業生で全体の88%を占めていた。そのため，今後の分析では，高校，短大，大学に少数のカテゴリを組合せ，中学・高校，短大・高専・専門学校，大学・大学院の3カテゴリを用いた。

### 各変数の平均値と標準偏差

親の「子どもの頃の体験」と「生きる力」の達成スキルと対人スキルの総合得点に関し，平均値と標準偏差をTable 1に示した。なお，Table 1では，親の「子どもの頃の体験」のうち，習い事体験に天井効果がみられたが，Table 2に示したように，学歴別に分析した場合には，中学・高校卒群で天井効果がみられなかったため，以降の分析に使用する変数として表記した。

### 親の「子どもの頃の体験」の最終学歴での比較<sup>1)</sup>

親の「子どもの頃の体験」が，回答者の最終学歴によって異なるかについて検討を行うため，一元配置分散分析を行った結果をTable 2に示す。

Table1 各変数の平均値と標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>
親の子どもの頃の体験 (n=818)		
地域社会体験	2.84	0.58
文化体験		
文化・芸術体験	2.81	0.88
自学習体験	2.78	0.73
習い事体験	3.31	0.82
家族体験		
家族との共同作業体験	3.09	0.58
親との対話体験	2.79	0.78
自然体験	2.75	0.89
親の生きる力 (n=807)		
達成スキル	2.99	0.37
対人スキル	2.94	0.39

Table2 親の「子どもの頃の体験」の最終学歴による分散分析の結果

	中学・高校 (n = 176)	短大・高専・ 専門学校 (n = 365)	大学・大学院 (n = 257)	<i>F</i>	<i>p</i> <
	<i>m</i> ( <i>sd</i> )	<i>m</i> ( <i>sd</i> )	<i>m</i> ( <i>sd</i> )		
子どもの頃の体験					
地域社会体験	2.79 (0.61)	2.84 (0.58)	2.87 (0.57)	1.093	n.s.
文化体験					
文化・芸術体験	2.53 (0.87) a	2.78 (0.87) a**,b	3.02 (0.84) a***, b**	17.395	.001
自学習体験	2.60 (0.73) a	2.72 (0.72) b	2.96 (0.96) a***, b***	15.330	.001
習い事体験	2.95 (0.92) a	3.36 (0.77) a***	3.48 (0.74) a***	24.346	.001
家族体験					
家族との共同作業体験	2.97 (0.61) a	3.12 (0.58) a*	3.14 (0.55) a**	5.197	.01
親との対話体験	2.51 (0.75) a	2.82 (0.77) a***	2.93 (0.76) a***	16.837	.001
自然体験	2.73 (0.92)	2.73 (0.89)	2.77 (0.86)	0.220	n.s.

注 表中のアルファベットは多重比較の結果を示している。同じアルファベット間で (例, aとa\*の間には5%水準で, bとb\*\*の間には1%水準で有意に) 差があることを示す。

注 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

1) 「親の生きる力」に関する各項目，および，最終学歴での比較は，安藤他 (2012) を参照されたい。

多重比較の結果、プラネタリウムや博物館、美術館などへ行った経験である「文化・芸術体験」と、図鑑や地球儀、望遠鏡などで観察したり調べたりした体験である「自学習体験」は、大学・大学院卒群のほうが他の2群よりも有意に多く、「文化・芸術体験」に関しては、短大・専門学校卒群のほうが中学・高校卒群よりも高いことが示された。

また、塾や通信教育などの学校外の学習や水泳やピアノなどの体験である「習い事体験」、家族でのお菓子作りや日曜大工などの体験である「家族との共同作業体験」、親の職業や自分の将来のことなどについて親と話した体験である「親との対話体験」に関しては、大学・大学院卒群と短大・専門学校卒群のほうが、中学・高校卒群よりも有意に多いことが示された。

一方、近所の人に褒められたり、叱られたりした体験やいじめを解決した体験である「地域社会体験」と、海や川で貝や魚を取ったり食べたりした体験や採集した昆虫を育てた体験である「自然体験」については、最終学歴による差はなかった。

### 親の「生きる力」への「子どもの頃の体験」の影響

次に、親の「生きる力」に対して、「子どもの頃の体験」のどのカテゴリが影響を与えるのかについて確認する。各変数間の関係を確認するため、まず、各変数間の相関分析を行い、次に、親の「生きる力」の達成スキルと対人スキルの尺度得点をそれぞれ従属変数にし、「子どもの頃の体験」の各カテゴリを独立変数にした重回帰分析を、ステップワイズ法を用いて行った。分析は、まず全体のデータでの分析を行い、続けて学歴別の分析を行った。

### 「子どもの頃の体験」と親の「生きる力」との相関関係

親の「生きる力」の達成スキルおよび対人スキル間の相関分析を行った結果を、Table 3-1、Table 3-2にそれぞれ示した。

その結果、全体のデータでの分析では、「子どもの頃の体験」は、いずれも達成スキルと対人スキルに有意に関係していた。次に、学歴別の分析を行ったところ、「習い事体験」「家族の共同作業体験」と「達成スキル」との関係、および「習い事体験」「家族の共同作業体験」「自然体験」と「対人スキル」と

Table 3-1 「子どもの頃の体験」と親の達成スキルとの相関関係

	親の達成スキル			
	全体 (n = 803)	中学・高校 (n = 171)	短大・専門学校 (n = 360)	大学・大学院 (n = 253)
子どもの頃の体験				
地域体験	.263***	.283***	.272***	.204***
文化体験				
文化・芸術体験	.298***	.310***	.298***	.216***
自学習体験	.346***	.380***	.315***	.299***
習い事体験	.163***	.288***	.022	.134*
家族体験				
家族の共同作業体験	.137***	.096	.128*	.121 <sup>+</sup>
親との対話体験	.249***	.261***	.213***	.217***
自然体験	.203***	.197**	.211***	.166**

注 <sup>+</sup>p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 3-2 「子どもの頃の体験」と親の対人スキルとの相関関係

	親の対人スキル			
	全体 (n = 803)	中学・高校 (n = 171)	短大・専門学校 (n = 360)	大学・大学院 (n = 253)
子どもの頃の体験				
地域体験	.229***	.261***	.179***	.250***
文化体験				
文化・芸術体験	.245***	.325***	.212***	.210***
自学習体験	.241***	.317***	.234***	.195**
習い事体験	.191***	.273***	.119*	.157*
家族体験				
家族の共同作業体験	.174***	.131 <sup>+</sup>	.235***	.088
親との対話体験	.271***	.328***	.265***	.195**
自然体験	.126***	.140 <sup>+</sup>	.141**	.080

注 <sup>+</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

の関係で、学歴によって有意な相関関係がみられた。

#### 「達成スキル」に影響を与える「子どもの頃の体験」

「達成スキル」への影響関係を検討するため、まず、全体のデータに関して重回帰分析を行った結果、「自学習体験 ( $\beta = .222, p < .001$ )」, 「地域社会体験 ( $\beta = .173, p < .001$ )」, 「文化・芸術体験 ( $\beta = .137, p < .001$ )」が、親の「達成スキル」に対して影響力を持つ「子どもの頃の体験」であることが示された (Table 4-1 参照)。

次に、このような影響関係が親の最終学歴によって異なるのかについて確認するため、学歴別に重回帰分析を行った。その結果、中学・高校卒群では、「自学習体験 ( $\beta = .294, p < .001$ )」, 「習い事体験 ( $\beta = .232, p < .001$ )」, 「地域社会体験 ( $\beta = .166, p < .05$ )」が、短大・高専・専門学校卒群では、「自学習体験 ( $\beta = .167, p < .01$ )」, 「地域社会体験 ( $\beta = .183, p < .001$ )」, 「文化・芸術体験 ( $\beta = .168, p < .01$ )」が、大学・大学院卒群では、「自学習体験 ( $\beta = .270, p < .001$ )」, 「地域社会体験 ( $\beta = .151, p < .05$ )」が、それぞれ、親の「達

成スキル」に対して影響力を持つ「子どもの頃の体験」であることが示された。

#### 「対人スキル」に影響を与える「子どもの頃の体験」

「対人スキル」への影響関係を検討するため、まず、全体のデータに関して重回帰分析を行った結果、「親との対話体験 ( $\beta = .148, p < .001$ )」, 「文化・芸術体験 ( $\beta = .136, p < .001$ )」, 「地域社会体験 ( $\beta = .144, p < .001$ )」, 「習い事体験 ( $\beta = .087, p < .05$ )」が、親の「対人スキル」に対して影響力を持つ「子どもの頃の体験」であることが示された (Table 4-2 参照)。

次に、このような影響関係が親の最終学歴によって異なるのかについて確認するため、学歴別に重回帰分析を行った。その結果、中学・高校卒群では、「親との対話体験 ( $\beta = .202, p < .01$ )」, 「文化・芸術体験 ( $\beta = .227, p < .01$ )」, 「習い事体験 ( $\beta = .175, p < .05$ )」が、短大・高専・専門学校卒群では、「親との対話体験 ( $\beta = .201, p < .001$ )」, 「自学習体験 ( $\beta = .167, p < .01$ )」が、大学・大学院卒群では、「地域社会体験 ( $\beta = .218, p < .001$ )」, 「文化・芸術体験 ( $\beta = .168, p < .01$ )」が、それぞれ、親の「対人スキル」に対して影響力を持つ子どもの

Table 4-1 子どもの頃の体験が親の達成スキルに与える影響（ステップワイズ法による重回帰分析結果）

	親の達成スキル							
	全体 (n = 788)		最終学歴					
			中学・高校卒 (n = 172)		短大・高専・専門 学校 (n = 363)		大学・大学院 (n = 253)	
$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	
子どもの頃の体験								
地域社会体験	.173 ***	5.123	.166 *	2.299	.183 ***	3.546	.151 *	2.480
文化・芸術体験	.137 ***	3.490			.168 **	2.879		
自学習体験	.222 ***	5.580	.294 ***	4.055	.167 ***	2.787	.270 ***	4.436
習い事体験			.232 ***	3.369				
家族との共同作業体験								
親との対話体験								
自然体験								
$R^2$	.163		.225		.152		.111	
調整済み $R^2$	.160		.211		.145		.104	
<i>F</i>	51.866 ***		16.194 ***		21.281 ***		15.669 ***	

注 表中の $\beta$ は、標準化偏回帰係数である。

注 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 4-2 子どもの頃の体験が親の対人スキルに与える影響（ステップワイズ法による重回帰分析結果）

	親の対人スキル							
	全体 (n = 788)		最終学歴					
			中学・高校卒 (n = 172)		短大・高専・専門 学校 (n = 363)		大学・大学院 (n = 253)	
$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	$\beta$	<i>t</i>	
子どもの頃の体験								
地域社会体験	.144 ***	4.114					.218 ***	3.541
文化・芸術体験	.136 ***	3.758	.227 **	3.051			.168 **	2.723
自学習体験					.143 *	2.526		
習い事体験	.087 *	2.451	.175 *	2.386				
家族との共同作業体験								
親との対話体験	.148 ***	3.870	.202 **	2.651	.201 ***	3.540		
自然体験								
$R^2$	.123		.188		.087		.090	
調整済み $R^2$	.119		.173		.082		.082	
<i>F</i>	27.987 ***		12.852 ***		16.964 ***		12.307 ***	

注 表中の $\beta$ は、標準化偏回帰係数である。

注 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$



頃の体験であることが示された。

### 【考察】

本研究では、まず、親の「子どもの頃の体験」と最終学歴との関連について検討した後で、親の「生きる力」に対して、子どもの頃のもののような体験が影響するのかについて確認し、更に、このような影響関係が親の最終学歴によって異なるのかについて確認した。以下にそれぞれの結果についての考察を行う。

#### 親の「子どもの頃の体験」と最終学歴

分散分析の結果から、親の「子どもの頃の体験」と、回答者の最終学歴には関連があり、大学・大学院卒のように教育歴が長いほど、子どもの頃に様々な経験を、より多く体験していることが示された。特に、博物館や美術館などに行き科学的情報や芸術的情報と接触した「文化・芸術体験」や、図鑑や地球儀、望遠鏡などでの調べ物や観察と言った「自学習体験」が、大学・大学院卒群で他の2群よりも有意に多かった点は興味深い。教育的観点からすると、これらを子どもが体験するためには、子どもの知的好奇心への家族の能動的な働きかけや物理的・経済的協力が必要である。すなわち、博物館や美術館、コンサート会場などで行われる科学的な催しや芸術的な催しに、保護者自身が興味を持ち、そのような場所に子どもを連れていく、あるいは新聞やテレビCMなどでの催し情報に興味を持った子どもを展示場や会場に連れていく必要があると言えるが、そのような場合、経済的な負担が生じることもある。それ以外にも、図鑑や地球儀や望遠鏡といった子どもの探索活動に必要な資料や機器を家庭に揃えたり、必要に応じて図書館などに連れていくなどについても同様の負担が考えられる。したがって、大学・大学院卒群の育った環境は、

他の群よりも、芸術や知的な探索活動がしやすく、そのような活動に対する親の理解が、より深かったことが背景にあると言える。さらに、塾などの学校外学習や水泳などの「習い事体験」に関しても、短大・専門学校卒群、大学・大学院卒群の平均値は中学・高校卒群と比較すると、天井効果が出るほど高かったことから、高学歴であるほど、子どもの教育のために費用をかける家庭であったと考えられる。以上の結果は、親の教育歴の長さが、家庭の文化的環境の整備に関与し（赤林ら，2010；篠ヶ谷・赤林，2012）、課外活動への投資にも影響する（篠ヶ谷・赤林，2012）という先行研究とも一致する。

その他、お菓子作りや日曜大工などの「家族との共同作業体験」や、様々なことについて話をするなどの「親との対話体験」に関しても、高学歴であるほど多く体験していた。また、親子で一緒に何かを作ったり、子どもが興味を持っている日常生活の出来事や将来のことについて語らうことは、密接な親子関係を築き、子どもの精神安定上も重要であるが、この点についても高学歴者の育った家庭のほうが、余裕があったと考えられる。以上の結果は、経験的には予測可能であるが、従来の研究では、明らかにされなかった知見として意味があるといえそうである。

一方、近所の大人との関わりなどの「地域社会体験」と、「自然体験」に関しては、学歴差は見られなかった。「地域社会体験」は、近所の人に褒められたり叱られたりした体験やいじめなどの問題を解決した体験で構成されている。このような経験は、親が良好な近所づきあいをし、子どもの友達を介した交流をしていれば生じると考えられることから差が生じなかったのであろう。

また、川や海で遊んだり、昆虫を育てたりといった自然体験は、自然の営みに直に触れ

て、間近で観察することができ、虫やクラゲに刺されたりといった予想外の経験をすることも多く、子どもの体験学習の場として適しているとされる(文部科学省, 2000)。したがって、学歴に関係なく多くの親は、海や山などに子どもを連れて行き、自然と触れ合う機会を与えようしていると考えられる。

ところで、人は自分が体験をして楽しかったことは子どもにも体験させたいと考える(白木ら, 2011)というが、そうであるならば、自然環境が今よりも豊かな時期に幼少期を過ごしたはずの本研究の回答者自身の自然体験の平均値が、やや低めであったことは子どもの教育上注意すべき点かもしれない。しかしながら、この点に関しては、本研究の調査対象が、首都圏の区内にある幼稚園児の保護者であったことなどが関係している可能性がある。今後、検討の必要があるだろう。

### 親の「達成スキル」に関わる「子どもの頃の体験」

全体および学歴別に分析を行った結果、全体では子どもの頃の体験のうち「自学習体験」、「地域社会体験」、「文化・芸術体験」が、親の「達成スキル」に対して影響力を持つことが示され、このうち、「自学習体験」と「地域社会体験」は、最終学歴に関係なく、親の「達成スキル」に影響力を持つことが示された。

一方、短大・高専・専門学校卒群では全体での分析と同様に「文化・芸術体験」が、中学・高校卒群では「習い事体験」が、それぞれ「達成スキル」に影響力を持つ子どもの頃の体験として抽出された。

まず、学歴に関係なく共通してみられた子どもの頃の体験である「自学習体験」、「地域社会体験」について考察してみよう。「達成スキル」は「論理性」、「探究心」などで構成されたスキルである。したがって、子どもの

頃に好奇心を持って自ら探索した「自学習体験」が、成人後の「達成スキル」に影響することは理解しやすいだろう。また、経済的に余裕があったとしても、子どもの知的好奇心を満たすために学習に必要なものを無制限に買い揃える親は少ない。大抵は、飽きっぽい子どもがどうしても必要とするものを選別して買い与えているだろう。そのため、子どもの立場では、自分の学習環境の充実のために、自ら親や親族に働きかけることも多い。例えば、親を納得させるために、兄弟など他の家族の使用可能性や学習効果などを説明するといった経験をすることがあり、そのような経験が論理性などを高め、達成スキルを高める遠因になるかもしれない。赤林ら(2010, 2012)は、家庭内の文化的環境が子どもの学力に関与する可能性を指摘しているが、本研究の結果は、子どもにとっての自学習環境の整備が、成人になってからの達成スキルにも影響を持つことを示すもので、興味深い結果といえるだろう。

一方、褒めたり叱ったりしてくれる親以外の大人の存在や、いじめを注意したり解決したりといった地域社会体験が「達成スキル」に影響したことも興味深い。近所付き合いが希薄化しているためか、対人トラブルの回避のためか、子どもが近所の大人に褒められたり叱られるといった経験は年々低下し、2009年にはこのような経験をした子どもが40%程度であったという報告もある(白木, 2010)。子どもにとって、親以外の大人から褒められたり叱られたりする経験は相対的に少ない。そのため、印象に残りやすく、褒められた体験は、その時にとっていた行動への正の強化に、叱られた体験は負の強化につながるのかもしれない。また、子どもがいじめなどを解決すると、子ども社会で一目置かれるだけでなく、親や周りの大人には褒められることが

一般的である。したがって、親以外の大人の評価は、どのような行動や態度がどのような評価を受けるのかといった一般的评价を子どもに意識させ、その結果、客観的、論理的なものをみることや規範意識の育成につながり、成長してからの「達成スキル」に関わるのかもしれない。この点については、より詳細な検討が必要であろう。

次に、学歴別の分析で違いがみられた「文化・芸術体験」と「習い事体験」について考察を行う。

「文化・芸術体験」は、全体での分析で抽出されたが、学歴別分析では、短大・高専・専門学校卒群でのみ影響力を示した体験であり、「習い事体験」は全体での分析では抽出されず、学歴別分析で中学・高校卒群のみで抽出された体験である。

このうち「習い事体験」に関しては、平均値において中学・高校卒以外の群では、天井効果が示されるほど、皆が体験しているものであるため、それらの群では抽出されなかったと考えられる。また、体験間の相関関係を確認したところ、他群では検出された「自学習体験」と「習い事体験」間の有意な相関関係（短大・専門学校卒群： $r = .228, p < .001$ ，大学・大学院卒群： $r = .181, p < .01$ ）が、中学・高校卒群では検出されなかった。したがって、中学・高校卒群では自学習に結びつく習い事体験が少なかったため、重回帰分析でステップワイズ法で先に抽出された自学習体験の影響を受けずに個別に抽出されたと考えられる。池田ら（2012）は、子どもの習い事で、最も多いのは水泳などのスポーツ系であると指摘しているが、本研究でも子どもの頃の習い事体験として、学習以外にスポーツ体験も尋ねていることが、このような結果に影響した可能性がある。地元の学校に通学することが多い中学・高校卒群は、他群と比べ、

生活圏が狭く、他の地域の人との人的交流の機会も少ないため、子ども時代に、学校以外で他の子どもやコーチなどと、何か共通の目的に向けて努力した経験が、成人してからの達成スキルに関係するのかもしれない。今後の検討が必要である。

一方、短大・専門学校卒群でのみ抽出された「文化・芸術体験」は、どの群でも平均値に天井効果は確認されず、相関分析でも、達成スキルに対して、3前後の有意な相関関係を示していた。ステップワイズ法での重回帰分析では、先に抽出された変数の影響が取り除かれるため、短大・専門学校卒群以外の群では「文化・芸術体験」と抽出された他の体験との相関関係が高かったために、その影響力が消失した可能性がある。そこで、中学・高校卒群の「自学習体験」「習い事体験」「地域体験」と「文化・芸術体験」、大学・大学院卒群の「自学習体験」「地域体験」と「文化・芸術体験」との相関関係を確認したところ、特に「自学習体験」と「文化・芸術体験」との相関関係では、中学・高校卒群では  $r = .611 (p < .001)$ ，大学・大学院卒群では  $r = .501 (p < .001)$  でいずれも比較的高い値が示された。しかし、短大・高専・専門学校卒群でも  $r = .543 (p < .001)$  で、他群と同等であることが示され、さらに、「地域体験」との相関係数も3群ともに、2前後であったことから、先に抽出された他の変数との関係が強いために抽出されなかったという上述の説明では十分な説得力を持たなかった。

「文化・芸術体験」は、「自学習体験」や「地域体験」と比較すると、単発的な学習イベントの体験である。このような体験が、短大・専門学校卒群でのみ、達成スキルに関係した理由については、彼らが体験した「文化・芸術体験」の内容が他群と異なるものかどうかなども含め、さらに確認する必要があるだろう。

なお、重回帰モデルの決定係数を確認したところ、中学・高校卒群では「自学習体験」「地域社会体験」「習い事体験」の3つの体験で達成スキルの20%程度、短大・専門学校卒群では「自学習体験」「地域社会体験」「文化・芸術体験」3つの体験で15%程度、大学・大学院卒群では「自学習体験」「地域社会体験」2つの体験で達成スキルの10%程度の説明力を持っており、高学歴になるほど「子どもの頃の体験」の影響力が減ることが示された。地元で育ち、地元で就職や結婚するなど、生涯的に比較的生活圏が狭い中学・高校卒群では、子どもの頃の体験が成人になってからの達成スキルに比較的大きく関わるという今回の結果は、注目すべき点であろう。

#### 親の「対人スキル」に関わる「子どもの頃の体験」

全体および学歴別に分析を行った結果、子どもの頃の「親との対話体験」「文化・芸術体験」「地域社会体験」「習い事体験」が、「対人スキル」に対して影響力を持つことが示された。このなかで、最終学歴に関係なく共通して抽出された体験はなかった。そこで、最終学歴ごとに、対人スキルに影響する「子どもの頃の体験」について考察していく。

まず、中学・高校卒群で抽出された「親との対話体験」「文化・芸術体験」「習い事体験」についてであるが、これらは、家や学校以外の日常的な対人関係と、美術館や博物館に行くといった単発的な学習的イベントの体験である。身近な重要他者である親と様々なことについて十分に語ることが、後の対人スキルに関係するという結果は納得いくものである。Osakwe (2009) は、早期教育の経験が社会的スキルにポジティブな影響を与えると指摘しているが、習い事により、同じ目標を目指す子どもや指導的な立場の大人との継続的

な関係を学校外で築くという体験が、対人スキルの形成に重要であるという今回の結果は興味深い。また、美術館や博物館での学習的イベントに参加している他の子どもやその親などとの接触機会は、普段合わない他者を意識したり、公共マナーを学ぶ良い経験になるといえる。そのため、他群と比較すると社会的ネットワークが狭くなりがちな中学・高校卒群にとっては、対人スキルを育成する重要な対人的体験なのかもしれない。なお、決定係数を確認したところ、中学・高校卒群では「親との対話体験」「文化・芸術体験」「習い事体験」の3つの体験で、対人スキルの20%程度を説明する重回帰モデルとなっており、他群の2倍以上の影響力を有していた。したがって、中学・高校卒群にとっては、子どもの頃の親との対話や学校外で出会う大人や子どもとの対人経験が、成人してからの対人スキルの形成に、より重要であるといえそうである。

短大・専門学校卒群では、子どもの頃の「親との対話体験」と「自学習体験」が、対人スキルに影響する体験として抽出された。「親との対話体験」が入ったことは、中学・高校卒群と同様であったが、全体での分析では抽出されなかった「自学習体験」がこの群にだけ抽出された点はユニークである。篠ヶ谷・赤林 (2011) は、親の学歴や家計収入が、蔵書数、楽器や絵画の有無、勉強机や勉強部屋などの家庭内の文化的環境の整備に影響していると指摘している。今回の調査対象者に関して、その親の学歴や家計収入についての情報はないが、一般的に学歴は子どものほうがやや高いが、概ね親子間で相関する(敷島, 2009; 河野, 2012) ことを考えると、短大・専門学校卒群は、比較的標準的な家庭出身であることが想定される。したがって、子どもが自学習のための書籍や器材を揃えてもらう

ためには、親や親族に頼んだり、説得したり、交渉したりしながら徐々に学習環境を整えていく必要があったかもしれない。そのため、この群では家庭内でのこのような経験が、成人になってからの対人スキルに関連すると考えられる。ただし、重回帰モデルの決定係数をみると、この「親との対話体験」と「自学習体験」の2つの体験は対人スキルの9%程度を説明しているにすぎないため、その点は留意しておくべきである。

大学・大学卒群では、子どもの頃の「地域社会体験」と「文化・芸術体験」が対人スキルに影響する体験として抽出された。「文化・芸術体験」は中学・高校卒群でも抽出されたが、「地域社会体験」は、この群でのみ影響力を持った体験である。この抽出された2つの体験で共通しているのは、どちらも、学校外で大人と接触する可能性がある体験であるが、「習い事」のように、指導的な立場の大人や、同じ目標を目指す子ども同士での親密で継続的な関係ではなく、比較的単発的な体験であるということである。したがって、この群では、子どもの頃の、普段接触することが少ない大人との改まった状況での対面経験が、のちの対人スキルに関係するのかもしれない。白木ら（2011）は、子どもの頃の地域活動やボランティア活動などが、後の人間関係能力や文化的作法などに関係すると指摘しているが、今回の結果からも、このような効果は特に大学・大学院卒群で顕著になる可能性が示されたといえそうである。ただし、この群でも、重回帰モデルの決定係数から、このモデルで説明できるのは対人スキルの9%程度である点は留意しておくべきである。

#### 【まとめ】

本研究で得られた結果をまとめると以下の4点に集約できる。①教育歴が長いほど博物

館や美術館などへ行くといった「文化・芸術体験」や「自学習体験」が多く、「家族での共同作業」や「親との対話」なども多く体験している、②達成スキルには、子どもの頃の「自学習体験」と「地域社会体験」が教育歴に関係なく影響する、③対人スキルに関与する子どもの頃の体験は教育歴によって異なる、④教育歴が短いほど達成スキルと対人スキルに対する「子どもの頃の体験」の影響力が強い。

本研究の結果から、「子どもの頃の体験」は、成長してからの「生きる力」に関与すること、達成スキルの育成には子どもの探究心を満足させるような自学習環境の整備が必要なこと、対人スキルの育成には「親との対話」に加えて、学校外の大人や子どもとの接触経験が必要であることなどが示唆された。

今後は、学歴別で得られた違いなどを明確にするため、個々の体験や達成・対人スキルの下位因子に関してより詳細な吟味を行うなど、モデルの精査を行う必要があるであろう。

#### 謝辞

本研究の調査にご協力いただきました園長先生はじめ現場の先生方、そしてご回答くださいました保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

本研究は、平成23～25年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号23501099）および調査の一部はJTB法人東京による共同研究費補助金（研究代表者：池田まさみ）を受けて遂行した。

#### 引用文献】

赤林英夫・中村亮介・直井道生・敷島千鶴・山下絢（2010）. 子どもの学力には何の関係しているか：JHPS子ども特別調査の分析結果から 慶應義塾経商連携グローバルCOEプログラムディスカッション・ペーパー.

- 赤林英夫・中村亮介・直井道生・山下絢・敷島千鶴・篠ヶ谷圭太 (2012). 子どもの学力と家計—「日本子どもパネル調査2011」を用いて—樋口美夫・宮内環・McKenzie, C.R. (編) パネルデータによる政策評価分析 [3] 親子関係と家計行動のダイナミズム 財政危機下の教育・健康・就業, 慶應義塾大学出版会 pp.25-48.
- 安藤玲子・池田まさみ・宮本康司 (2012). 親の生きる力と子どもの生きる力 金城学院論集人文科学編9 (1), 1-14.
- Ennis, R. H. (1987). *A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities*. In J. B. Baron, & R. J. Sternberg (Eds), *Teaching thinking skills: Theory and practice*. New York: W. H. Freeman and Company. Pp. 9-26.
- Ennis, R. H. (1991). *Critical thinking: A streamlined conception*. *Teaching Philosophy*, 14(1), 5-25.
- 藤木大介 (2009). 子どもの創造的課題解決力を育成できる教員・保育者の養成: 「子ども学」を具現する者としての教員・保育者, 子ども未来学研究, 4, 43-46.
- Galliford, J. A. (2003). "The effects of music experience during early childhood on the development of linguistic and non-linguistic skills" *Dissertations from ProQuest*. Paper 2018.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2000). クリテikalシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究, 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学), 51, 161-173.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2001). クリテikalシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (2). 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 21, 93-102.
- 池田まさみ・安藤玲子・宮本康司 (2012). 幼児期の問題行動と家庭力 菅原ますみ (編著) 『1巻 子ども期の養育環境とクオリティ・オブ・ライフ』. 金子書房
- 池中雅美 (2008). 早期英語学習経験と英語力および学習態度に関する研究 北陸学院短期大学紀要 40, 85-94.
- 伊藤榮子 (2005). 母子関係の形成: 家族による発達の側面 日本赤十字秋田短期大学紀要 9, 11-21.
- 岩崎久美子 (2010). 第1章 家庭で求められる取組—子育てのパラダイム, 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書 第2部「家庭」・「学校」・「地域」に向けた提言 国立青少年教育振興機構 pp.131-138.
- 河野志穂 (2012). 大学生の能力観と家庭背景 早稲田教育評論 26(1), 273-294.
- 楠見孝・平山るみ (2009). 消費者の食品リスクリテラシーの構造: 学歴と批判的思考態度の影響 日本心理学会第73回大会発表論文集, 86.
- 経済産業省 (2006). 「社会人基礎力」の具体的な育成・活用シーン. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
- 宮本康司・池田まさみ・安藤玲子 (2013). 子どもの生きる力へ保護者の幼少時代体験が与える影響—環境教育の観点から— 東京家政大学人間文化研究所紀要 第7集, 91-101.
- 文部省 (1996). 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申), 文部省中央教育審議会.
- 文部科学省 (2000). 平成12年度教育白書.
- 文部科学省 (2010). 今, 求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (小学校編) 総合的な学習の時間を核とした課題発見・解決能力, 論理的思考, コミュニケーション能力向上に関する指導資料 教育出版.
- Osakwe, R. N. (2009). The Effect of Early Childhood Education Experience on the Academic Performances of Primary School Children, *Stud Home Comm Sci*, 3(2) : 143-147.
- Skodol, A.E., Bender, D.S., Pagano, M.E., Shea, M.T., Yen, S., Sanislow, C.A., Grilo, C.M., Daversa, M.T., Stout, R.L., Zanarini, M.C., McGlashan, T.H., and Gunderson, J.G. (2007). Positive Childhood Experiences: Resilience and Recovery From Personality Disorder in Early Adulthood, *J Clin Psychiatry*. 68(7), 1102-1108.
- 敷島千鶴・山下絢・赤林英夫 (2012). 子どもの社会性・適応感と家庭背景 —日本子どもパネル調査2011から— 樋口美夫・宮内環・McKenzie, C.R. (編) パネルデータによる政策評価分析 [3] 親子関係と家計行動のダイナミズム 財政危機下の教育・健康・就業, 慶應義塾大学出版会 pp.49-79.
- 敷島千鶴 (2009). 学歴再生産論検討—親子・配偶者の類似性から— 慶應義塾経商連携グローバルCOEプログラムディスカッション・ペーパー

- 島根 三佳・加藤朋子・茗井香保里（2001）. 幼児教育専攻学生における幼児期の遊び体験が及ぼす運動・生活習慣について（2）：居住環境の異なる学生との比較 日本保育学会大会研究論文集（54），618-619.
- 篠ヶ谷圭太・赤林 英夫（2012）. 家庭背景が学力に与える影響とそのプロセス—階層的重回帰分析と構造方程式モデリングを用いた検討— 樋口美夫・宮内環・McKenzie, C.R.（編）パネルデータによる政策評価分析 [3] 親子関係と家計行動のダイナミズム 財政危機下の教育・健康・就業，慶應義塾大学出版会 pp.81-101.
- 白木賢信・土屋隆裕・中村織江（2011）. 「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」（平成22年度調査）報告書，国立青少年教育振興機構
- 白木賢信（2010）. 「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」（平成21年度調査）報告書，国立青少年教育振興機構
- Shonkoff, J.P., & Garner, A. S. (2012). The Lifelong Effects of Early Childhood Adversity and Toxic Stress, *Pediatrics*, e232-e246.
- Sullivan, R., & Lasley, E. N. (2010). Fear in Love: Attachment, Abuse, and the Developing Brain. *Cerebrum*, 1-14.
- <http://www.dana.org/news/cerebrum/detail.aspx?id=28926>
- Tang, A. C., Reeb-Sutherland, B. C., Yang, Z., Romeo, R. D., and McEwen, B. S. (2011). Neonatal Novelty-Induced Persistent Enhancement in Offspring Spatial Memory and the Modulatory Role of Maternal Self-Stress Regulation, *The Journal of Neuroscience*, 31 (14), 5348–5352.
- Tierney, A. T., Bergeson, T. R., & Pisoni, D. B. (2008). Effects of Early Musical Experience on Auditory Sequence Memory, *Empirical Musicology Review*, 3 (4), 178-186.
- 徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美（1995）. スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響 健康科学 17, 59-68.
- 蓬田高正・飯田 稔・井村 仁・関 智子・岡村泰斗（2003）. 長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要 26, 103-106.
- 米澤好史・米澤稚子（2003）. 教育環境における「学習の場」理論の提唱と実践 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 13, 37-46.

## Appendix

### 親の子どもの頃の体験項目

地域社会体験	近所の人に叱られたこと いじめなどの問題を解決したこと 先生や近所の人にほめられたこと
文化体験（習い事体験）	学校外学習（塾，通信教育，家庭教師など）を行ったこと 学習以外の習い事（水泳，ピアノ，習字など）をしたこと
文化体験（芸術文化体験）	美術館や音楽会に行ったこと プラネタリウムや博物館，科学館に行ったこと
文化体験（自学習体験）	望遠鏡や虫眼鏡などで，天体や生き物を観察したこと 図鑑をじっくり読んだり，図鑑で調べたりしたこと 地図や地球儀を見て，位置を確かめたこと
家族体験（共同作業体験）	家でお菓子を手作りしたこと 日曜大工など，家の人と一緒にものづくりをしたこと 親に勉強を教えてもらったこと
家族体験（親との対話体験）	自分の将来や進路について親と話したこと 自分の読んだ本について親と話したこと 親がどんな仕事をしているかについて親と話したこと
自然体験	海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりしたこと 自分で採った貝や，釣った魚を食べたこと 自分でつかまえた昆虫などの世話をしたこと